

柿白渋病に関する2・3の観察

村田 全・立石 壽・野田政春

(福岡県農業試験場)

I 病徴と子のう殻の形成

鋤方、富樫氏等は本病の病徴について、嫩葉と成葉及び老葉に発生する2つの型を報告している。筆者等の観察も概ね両氏等の結果と一致するが、毎回同一葉について定期的に調査した結果、次の3つの病徴を観察しえた。

(1) 1・2・3次伸長枝(春枝, 夏枝, 秋枝)の嫩葉期から成, 老葉期にかけて集団または散在した小黑斑点を葉表に形成する病徴で秋季における子のう殻の形成はみられない。

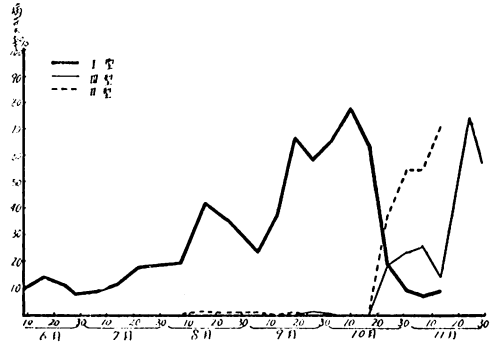
(2) 主として1次伸長枝に嫩葉期から成葉期にかけて上記(1)の病徴を現わし, 10月中旬以降, 葉裏に白霜状菌糸の発生をみるものであり, 子のう殻は多数形成される。

(3) 嫩葉期及び成葉期には肉眼的に観察される病徴を現わさず, 10月中旬以降, 葉裏に白霜状菌糸の発生をみる病徴で子のう殻も(2)に次いで形成が多い,

これらを図示すると第1図, 及び第1表のとおりである。

子のう殻の形成は10月24日にはじまり11月中, 下旬が最高であった。

第1図 病徴型



II 子のう殻の落下と春季に残存する樹上各部の越冬子のう殻数

子のう殻は11月13日から落下をはじめ, 11月24日から29日にかけて最も多く落下するようであるが, 北島氏が報じているように子のう殻の1部は樹枝上において越冬するようであり, 垂主枝, 側枝, 結果母枝等について越冬後の密度を枝長30cm 間5カ所について調査したところ次の結果をえた。

第1表 病徴型と子のう殻の形成

調査月日	事項	1 次 伸 長 枝					2 次 伸 長 枝				
		調査葉数	I 型 %	II 型 %	III 型 %	合計 %	調査葉数	I 型 %	II 型 %	III 型 %	合計 %
1961年 10月	24日	116	0.0	0.0	8.6	8.6	69	0.0	1.4	7.3	8.7
	31	99	0.0	4.0	10.1	14.1	68	0.0	2.9	16.2	19.1
	6	99	0.0	7.1	16.2	24.2	68	0.0	5.9	22.1	27.9
11.	13	92	0.0	3.3	29.3	32.6	63	0.0	11.1	31.7	42.9
	24	71	—	—	—	40.8	29	—	—	—	38.2
	29	28	—	—	—	39.3	3	—	—	—	0.0

第2表 枝上における子のう殻残存状況

枝 別	プロット	I					II					計	平均
		I	II	III	IV	V	I	II	III	IV	V		
垂 主 枝	1	1	1	0	0	0	2	0.4					
	24	16	13	20	29	102	20.4						
側 果 母 枝	15	12	23	37	64	151	30.2						